定家の「見わたせば」試論-白詩「蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中」との関連をめぐって-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関口, 祐未 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7322

文学研究論集第16号
'02・2

定家の「見わたせば」試論
―白詩「蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中」との関連をめぐって―

Trial review on Teika's Waka "Miwataseba"

博士前期課程 日本文学専攻 二〇〇〇年度入学
関口 祐未
SEKIGUCHI Yumi

はじめに

「二見浦百首」（文治二年〈1186〉詠）から『新古今集』に入集、三夕の歌の一つとしても知られる、定家の、

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮
（『拾遺愚草』一三五、『新古今集』巻四・秋・三六三）

の歌については、これまで多くの解釈、検証が繰り返しなされてきた。[1]

一方、白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」（『和漢朗詠集』五五五）の詩句との関わりについては、あまり触れられずにきた。「見わたせば」の歌は、『源氏物語』「明石」巻の、「はるゞと物のとゞこほりなき海づらなるに、中〳〵春秋の花紅葉の盛りなるよりは、たゞそこはかとなう茂れる蔭どもなまめかしきに、」の箇所を本説とする見方が一般的であり、また「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」自体が著名な詩句で、教養として不可欠な知識であったはずで、その受容の有無については取りたてて挙げるまでもないという考えが背景にあるのかもしれない。

本稿では、「見わたせば」の歌と白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」とが、具体的にどのように関わるのか考察を試みるとともに、その関係を探ることで、文治年間初期において、若き定家がいかに実作に励んでいたかを検討したい。

なお、『拾遺愚草』『拾遺愚草員外』の歌、歌番号は久保田淳氏『訳注藤原定家全歌集』（河出書房新社　昭和六十年）より引用、他は断りのない限り『新編国歌大観』に基づく。

一　定家「見わたせば」の歌と白詩

定家「見わたせば」の歌に、白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」の取り込みが考えられるか否かについては、少ない言及ながら諸説ある。「見わたせば」の歌と「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」との関連については、現存する『拾遺愚草』や『新古今集』の古注釈には見られない。近代になって杉本行夫氏『懐風藻』の「懐風藻注釈序」において、鈴木虎雄氏が、

白楽天詩の「蘭省花時錦帳下、廬山夜雨草庵中」と藤原定家の「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」とは果して暗合なるか、白詩の一連、その前句が彼の翰林学士として都にあり宮殿に宿直して詔勅を起草せし栄華の時期を表し、下句が現在江州司馬に貶謫せられて草庵に夜雨を聞くの寂しさを表して互に対照せしめたると、定家の歌の上句が宮宴の盛時を叙し、下句が貶所のあはれを写して相反映せしめたるとは、常に白詩を誦したりといはるる定家としてはよしや意識的には模倣をなさざりしとするも、冥冥不知の間に類似を生ぜしめたりと観測せざるを得ざるなり。類似を生じて模倣を忘るるに至り、もしくば模倣以上のものを生ずるに至らば是れ真に学習の極致に達したるものにして、他国文学の長所を摂取せんとする者のまさに標式となすべき所に非ずや。

としたのが最初のようである。他に、水野平次氏『白楽天と日本文学』では、清少納言と頭の中将との応酬で著名な『枕草子』七十八段などとともに「見わたせば」歌を挙げその翻案であることを指摘し、田中克己氏『白楽天』では、「巧みに換骨脱胎している」と注釈する。(2)

右のような漢文学者側からの発言が見られる一方で、小島吉雄氏は『新古今和歌集の研究正篇』「十　藤原定家の『見渡せば花も紅葉も』の歌について」において、鈴木虎雄氏の白詩を翻案とする説を許容できるとしながらも、「しかし、それを定説とすることについては、なほよく考へてみようと思ふ。」と保留する。(3) 赤羽淑氏は『定家の歌一首』で、「定家は源氏や白楽天の影響を受けており、それが発想に意外性の効果をもたらすことはたびたびであって、この歌もたしかにそれは認められる。問題はそれが歌の内部構造の中にどのように取り込まれ、生かされているかということであろう。」と小島氏と同じ立場をとる。(4)

石川徹氏「定家の作歌と物語との関係―『花も紅葉もなかりけり』の解釈を中心に―」では、鈴木虎雄、水野平次両氏による指摘を注目すべき卓れた解釈とし、「見わたせば」歌の構想にヒントを与えたとしながらも、詞句に限っては関係ないものとする。(5) また、久保田淳氏『新古今和歌集全評釈』では、「少なくとも、この句題に拠って詠んでいるのでないことは、確かである。その句とわかるように詠まなければ、句題和歌ではない。」とする。(6)

歌の典拠である漢詩文の詩句が詞書きに記されない句題和歌は、平安

時代から多く詠まれたが、その典拠の発見に関しては極めて困難である場合が少なくない。「見わたせば」の歌については、白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」が句題として詠まれたとするには、白詩の詩句に直接対応する詞が見当たらず、「花時錦帳」が「花も紅葉も」に、「草庵」が「浦のとまや」に類似する程度であって、確かに句題和歌とする妥当性はないであろう。

しかしながら、上句の「花も紅葉も」の伝統的王朝美ともいえる対象と、下句の「浦のとまやの秋の夕暮」という王朝美からはほど遠い風景とが、宮中の華やかな帳の下で、政治の中心にいて花盛りを送る「蘭省花時錦帳下」と、左遷先の雨降る夜に、草庵で孤独に時を過ごす「廬山雨夜草庵中」のコントラストと重なる、内容上構造上の対応は認められるのであり、その点は見逃せないのである。

また、定家の歌において、中国の詩文がその典拠のうち、三分の二を白居易の詩が占めるといわれるほど、『白氏文集』と定家の作品は密接なのであり、[7]『白氏文集』の詩句に早くから慣れ親しんでいたであろう定家のことを考慮すれば、「二見浦百首」の当時においても、「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」は当然知られていたであろう。[8]定家における白居易の詩摂取については、『白氏文集』から受容した場合と、『和漢朗詠集』を媒介として間接的に摂取された場合とがあり、後者の方が多いとされることから、「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」も『和漢朗詠集』を通してのことかもしれない。定家の意図とは別に、構造、内容がおのずから似通う結果となった可能性もある。

定家二十歳、最初の百首歌「初学百首」（治承五年〈一一八一〉四月詠）や、続く「堀河院題百首」（寿永元年〈一一八二〉春詠）など、白居易の詩を参考になされた習作はすでに見られる。「見わたせば」の歌が詠まれた「二見浦百首」においては、例えば「雑」二十首のうち最後の五首の歌群は、『白氏文集』の登場人物である「楊貴妃」（『拾遺愚草』一九六番歌）、「李夫人」（一九七）、「王昭君」（一九八）、「上陽人」（一九九）、「陵園妾」（二〇〇）の題で詠作されたのをはじめ、

あさなぎにゆきかふ舟のけしきまで春をうかぶる浪の上哉
（『拾遺愚草』一〇九・春）

「水駅路穿児店月　花船棹入女湖春」
（『和漢朗詠集』五一三・「水」・白楽天）

ふゆきてはいりえのあしのよをかさね霜置そふるつるの毛衣
（同一五二・冬）

「雪似鵝毛飛散乱　人被鶴氅立徘徊」
（『和漢朗詠集』三七六・「雪」・白楽天）

山ふかき竹のあみどに風さえていくよたえぬる夢ぢなる覧
（同一八九・雑「山家」）

「風生竹夜窓間臥　月照松時台上行」
（『和漢朗詠集』一五一・「夏夜」・白楽天）

などの歌が代表として挙げられる。それぞれに漢詩的世界を漂わせ、絵

画的、印象的な作品となっている。なかでも一八九番歌は、「山ふかき」「竹のあみど」「風さえて」が、いずれも漢語（深山、竹戸、竹扉、風冷ジ）を歌語に改めたもので、さらに上句の景物構成に漢詩的世界を、下句に和歌の伝統的歌格を詠出している点で、一首全体が革新的な詠とされる。[9]

「二見浦百首」における、漢詩の句や世界を積極的に歌の中に取り込もうとする定家のこのような姿勢は、新たな歌の世界を模索する態度に通じるものであると同時に、「見わたせば」の歌における白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」摂取の、充分な可能性を窺わせるものであろう。問題は、「見わたせば」の歌にどのように取り込まれ、いかなる効果を生じているのかという点である。

二　白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」

白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」は、『和漢朗詠集』巻下、雑に「山家」題で収められている著名な詩句（五五五番）である。出典は『白氏文集』（巻十七　新釈漢文大系番号一〇七九）[10]の、「廬山草堂、夜雨獨宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」と題された七言律詩の一節であり、江州に左遷された白居易が、廬山の草堂に夜雨の音を聞きながら一人宿した折、その感懐を詩にまとめ、都長安で栄達の道を歩む友、牛二、李七、庾三十二（いずれも官名）にその詩を送ったというものである。[11]「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」はその第三、四句にあたり、摘句でこの二句が引かれる形をとる。その全篇を新釈漢文大系本より次に掲げる。

丹霄攜手三君子　白髪垂頭一病翁
蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中
終身膠漆心応在　半路雲泥迹不同
唯有無生三昧観　栄枯一照両成空

前篇の意味をとれば、あなたたち三人は、丹霄（宮中のこと）にいて手を取り合って仕えているが、私だけは白髪を垂れ病翁となって江州に貶されている。あなたたち三人は、蘭省（宮中図書を扱う尚書省、あるいは中央官庁の唐名）の花盛りの中、錦帳（宮殿のこと）の下で愉快な時を送っているが、私はというと、廬山の雨降る夜に、侘しい草庵の中で寂しく過ごしているよ、となる。

白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」は、大江匡房談、藤原実兼筆記の『江談抄』（天永二年〈一一一一〉頃成立か）第四では、

古人伝へて云はく、「この句、文集第一の句なり」と云々。
（新大系本より引用）

とあるように、古来『白氏文集』を代表する著名な詩句であったことが知られる。

我が国の文学作品に現れた白詩を探せば、『枕草子』の「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」から始まる七十八段、清少納言と頭の中将である藤原斉信とのやりとりは有名である。

「蘭省花時錦帳下」と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ。御前おはしまさば、御覧ぜさすべきを、これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に、消え炭のあるして、「草の庵を誰かたづねむ」と書きつけて取らせつれど、また返事も言はず。（新全集本より引用）

斉信の「末はいかに」に対する清少納言の返事、「草の庵を誰かたづねむ」は、「蘭省花時錦帳下」の対句「廬山雨夜草庵中」を踏まえて、和歌の形に翻案したものであるが、当時話題にあったと想像される公任の句、

いかなるをりにか
草のいほりをたれかたづねむ
とのたまひければ、いる人、たかただ
ここのへの花の宮こをおきながら　（『公任集』四〇一）

の「草のいほりをたれかたづねむ」をそのまま引用したものとされる。

白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」は、文人なら誰もが心得ておくべき教養の一つであったと考えられるが、白居易の詩を多く取る『句題和歌』や『千載佳句』には取られていない。第二次『白氏文集』ブームとされる平安中期頃になって[12]、『枕草子』や『公任集』などの文学作品に姿を現しはじめ、『和漢朗詠集』にも収められるようになった経緯がある詩句のようである。

時代は下がって十二世紀後半の平安末期になると、『本朝続文粋』（康治元年〈1142〉～久寿二年〈1155〉の間に成立か）に「扈従者蘭省錦帳之近臣、将迎者薫帯葛巾之逸客」（巻十三・藤原敦光）と、『本朝無題詩』（応保二年〈1162〉～長寛二年〈1164〉の間に成立か）に「桃李春風蘭省興、梧桐夜雨草堂情」（巻四・法性入道殿下）、「残鬢雪寒花省夕、孤夢雨草堂秋」（巻五・藤原茂明）と、「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」を翻案したと思われる作品が見られる。

同じ頃、和歌では、

さみだれにおもひこそやれいにしへの草のいほりの夜はのさびしさ
（『千載集』夏・一七七・輔仁親王）

むかしおもふくさのいほりのよるの雨に涙なそへそ山時鳥
（『新古今集』夏・二〇一・俊成、『長秋詠藻』五一三・「郭公」）

などの著名な歌が詠まれるようになる。

定家は後に、建保六年〈1218〉詠の「文集百首」（五十七歳）において、慈円とともに、

蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中
草の庵の雨にたもとをぬらすかな心より出でし都こひしも
（『拾玉集』一九六四）

廬山雨夜草庵中

しづかなる山路の庵の雨の夜に昔恋しき身のみふりつゝ

（『拾遺愚草員外』三二五五）

と詠んでいる。他にも白詩を翻案したと思われる歌としては、

ふちばかま思ひこそやれ花のとき草の庵の秋の雨にも

（「俊成五社百首」二四二・「蘭」・文治六年〈一一九〇〉十一月十日春日社に奉納）

蘭省の花のにしきの面影にいほりかなしき秋の村雨

（『拾遺愚草員外』三一二一・「三十一字歌」建久七年〈一一九六〉秋詠）

などが挙げられる。このように見てくると、歌に「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」を取り込む場合は、下句「廬山雨夜草庵中」の、草庵で配所暮らしを送る白居易の心事を強く意識して詠まれる場合と、公任の歌や「ふちばかま」「蘭省の」の歌のように、上下句をともに踏まえて詠まれる場合に分かれるが、前者の方が一般的なようである。また、「草の庵」（庵）と「雨」（さみだれ、村雨）の組み合わせが詠み込まれているのも特徴的である（但し公任歌は「草のいほり」のみ）。これらの翻案歌群と比較すると、「見わたせば」の歌は、草庵、雨をはじめ、直接に白詩の詩句と対応する詞が見られず、さらに白詩の対句全体の、主に「構想」を中心とした取り込みである点が他の翻案歌とは種を異にするのである。

こうして、白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」の翻案とするのにこれまで躊躇されてきた理由は、「見わたせば」歌の、翻案の仕方の特異性にあると考えられるのである。

三　拾遺集一一〇番歌

「見わたせば」の歌に、枠組み、構想を中心とした、変則的ともいえる白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」の摂取を想定するなら、それは定家独自のものであろうか。

「新しい心」を歌に詠み込もうと、意欲的に詠作を試みていた当時の定家ではあったが、残念ながら定家独自の発想とは言い難い。先例として、拾遺集一一〇番歌の存在を挙げることができる。以下、新大系『拾遺和歌集』より引用する。

題知らず　　よみ人知らず

今日見れば玉の台もなかりけり菖蒲の草の庵のみして（夏）

この歌は、拾遺抄にはない、拾遺集新出歌である。「よみ人知らず」となっているが、十世紀末から十一世紀初頭の間に成立したと推定される『賀茂保憲女集』四九番歌に収められていることから、賀茂保憲女（生没年時未詳）の歌とされる。[13]「よみ人知らず」とされたのは、拾遺集撰集時には、まだ歌人としての名声がそれほど高くなかったためであろう。

「今日見れば」の歌は、屏風歌か実景歌かは分からないが、五月五日の端午の節句を詠んだものである。五月五日の今日、あたりを見渡せ

ば、華やかな殿舎もないことだ。菖蒲を軒端に葺いた草の庵があるばかりで、の意となろう。端午の節句の折、どの家の軒端にも菖蒲が挿されている景を詠んだ歌である。「玉の台」「草の庵」は、漢語の「玉台」「草庵」を翻案したもので、壮麗な宮殿楼閣、草葺きの粗末な家屋を意味し、対句的な組み合わせとなっている。[14] 菖蒲の挿された宮殿を「菖蒲の草の庵」と見立てたところに、この歌の個性と面白さがある。

この歌には、

あやめ草軒のかぎりはひまもなみけふはよどのやあらは成るらむ

（『海人手古良集』一四・夏）

を参考に詠まれたとの指摘があるが、[15] 上下句の、「玉の台」「菖蒲の草の庵」という対句的歌語の配置、及び「（菖蒲の）草の庵」の詞から、白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」を同工異曲的に詠み替えたものとも考えられよう。上句の、殿舎の美称である「玉の台」が、中央官庁の「蘭省」、及び天子のおられる「錦帳」に対応する点もその裏付けとなる。「玉の台」は、歌の世界では『竹取物語』に、

むぐらはふ下にも年はへぬる身の何かは玉のうてなをもみむ（一三）

とあり、『古今和歌六帖』第六にも、

なにせんにたまのうてなも八重むぐらいづらんなかにふたりこそね

め　（三八七四・「むぐら」）

とあることから、葎が繁る賤の家などと対に詠まることの多い歌語であったようだ。その点では「今日見れば」の詠も例外ではないが、「玉の台」「菖蒲の草の庵」といった二物が、上下句と「蘭省花時錦帳」「草庵」に倣う形で並列されており、「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」の漢詩文体を骨格として詠まれたと考えられるところに、「今日見れば」の歌の特徴が見出されるのである。

このように、白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」の、構想が意識されてなされた翻案は、定家の「見わたせば」歌より前に、「今日見れば」の歌で既に行われていたことが知られるのであるが、ここで注目すべきは、「今日見れば」の歌と定家の「見わたせば」の歌との間には、白詩を共有することから生まれる構成上の類似の他に、それぞれの詞句に逐一対応が見られるという点である。

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮　（定家）

今日見れば玉の台もなかりけり菖蒲の草の庵のみして　（保憲女）

視点としての主体を「見わたせば」「（今日）見れば」と表した点、王朝美を代表する「花も紅葉も」と、王宮の象徴としての「玉の台」、それら両者を第三句「なかりけり」と否定した点、その消滅によって一層鮮やかに佇む、苫を葺いた仮小屋の「浦のとまや」と、菖蒲を挿した殿舎を見立てた「菖蒲の草の庵」といった具合に、その対応は鮮やかであ

る。ただし、「見わたせば」歌は第五句が「秋の夕暮」と体言止めとなっており、「なかりけり」の三句切れと合わせて新古今的特徴を有する。この点は、西行の「こころなき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮」（『新古今集』巻四・秋上・三六二）の存在と大きく関わるであろう。時代的好尚の差によるものと考えていいだろう。

ここにきて、定家の「見わたせば」の歌が、白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」の構想、枠組みを直接取り入れたというより、むしろ白詩を摂取したと思われる「今日見れば」の歌を参考とすることによって、間接的摂取という形で白詩を取り込んだのではないか、との推察に至るのである。「今日見れば」の歌を媒介とした結果、白詩の面影を彷彿とさせるのではないか。

「見わたせば」の歌には、これまで、

ふる雪はきえでもしばしとまらなん花ももみぢも枝になきころ

（『後撰集』冬・四九三・題しらず・よみ人しらず）

の歌が本歌、参考歌として挙げられてきた。下句「花ももみぢも枝になきころ」の詞続きを踏襲したものとされるが、右に見てきたような「今日見れば」歌との詞句などの対応を考えれば、替え歌のように詠み替えたものとして、「今日見れば」を本の歌とするのがより適切ではないだろうか。

定家「見わたせば」の歌と白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」との関係は、拾遺集「今日見れば」の歌を媒介とすることで、結果的に「見わたせば」の歌に陰影として現れたものと解釈されるのである。

四　拾遺集と定家

拾遺集一一〇番歌「今日見れば」は、「見わたせば」歌の本の歌としてだけでなく、参考歌としてもこれまで挙げられずにきた。「今日見れば」の歌は、和歌史の中でどのような位置を占めるのか見ていく。[16]

拾遺集「今日見れば」の歌は、菖蒲草を主題とした歌群の一首である。

延喜御時歌合に　　よみ人知らず

五月雨は近くなるらし淀河の菖蒲の草もみくさ生ひにけり

（一〇八・夏・抄ナシ）

屏風に　　大中臣能宣

昨日までよそに思し菖蒲草今日我が宿のつまと見る哉

（一〇九・抄七〇）

題知らず　　よみ人知らず

今日見れば玉の台もなかりけり菖蒲の草の庵のみして

（一一〇・抄ナシ）

延喜御製

葦引の山郭公今日とてや菖蒲の草のねにたてて鳴く

（一一一・抄七一）

一〇八番歌で五月雨前の菖蒲草を、一〇九、一一〇番歌では五月五日「今日」の、端午の節句の菖蒲草を詠む。続く一一一番歌は、菖蒲草と

郭公を詠むが、「今日」「菖蒲の草」と、一〇九、一一〇番歌の歌語をそのまま引き継ぐ形で置かれている。拾遺抄には一〇九番歌と一一一番歌がともに並んで収められているので、時間推移（五月雨前→五月五日→五月五日以降）、素材（菖蒲草）という連続性が考慮されて、一一〇番歌はその間に配されたものと考えられる。

一方、一一〇番歌の、菖蒲草を挿した軒端を草庵に見立てる詠は、菖蒲をほととぎすと取り合わせたり、物の文目に掛けて詠まれたりすることが多い点や、端午の節句を、軒先の菖蒲、根合せや粽、薬玉の贈答に関連して詠むのが一般的であったことからすれば、[17]当時目新しかったはずである。その点が拾遺集撰者の目を引いて、拾遺集に加えられたものと想像されるのである。

佐藤和喜氏『平安和歌文学表現論』「第一節　拾遺集歌の構造」「第二節　拾遺集歌の生成―十世紀後半の新傾向をめぐって―」によれば、拾遺集には古今集歌に近似する歌が多く含まれる一方で、古今集歌の特質を越える、「新しい歌」が少なくないとする。[18]古今集歌においては、その歌の主体が、対象に直接相対し、主体が歌の場を形成する一時的要素であるのに対して、拾遺集歌では、歌の主体は景を外から捉える二次的要素であり、客観化された世界あるいは自己を外から捉え判断する性質が見られるとする。

「今日見れば」の歌について佐藤氏は特に触れないが、佐藤氏の論旨に沿って一一〇番歌を改めて見ると、右のような、古今集歌にはない新たな性質の萌芽が認められることに気づくのである。

第一に、下句「菖蒲の草の庵」は、単なる見立てられた景色に終わらず、上句「今日見れば玉の台もなかりけり」と歌の主体が景から一歩退いて対象を眺めることで、景の一層の賞味につながる効果をもたらす。また、上句が「今日見れば玉の台もなかりけり」と、下句の景に対する主体の判断性、論理性を有しながらも、上下句が並列されることで、その論理性が語法的に抑制され、上下句がパラレルな関係となっている点、「玉の台」「（菖蒲の）草の庵」と対照的な詞句が詠み込まれたことで、一首全体がより印象的となっている点、このような二文構成が漢詩文体（「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」）から影響を受けたと考えられる点などが挙げられるのである。[19]

これらの特徴は、十世紀後半から現れる、古今集歌とは性質を異にする新たな傾向、近代的な新古今歌風の兆しともされる性質に合致するものであり、佐藤氏によれば、このような二文並列の文体は、拾遺抄になく、叙景への傾斜が著しい拾遺集新出歌（以下「集新出歌」と記述）に多く見られるとする。一一〇番歌も集新出歌であり、その点も注目されるが、結句を体言化すれば、まさに新古今歌と見える点も看過されるべきではないであろう。

以上から、「今日見れば」の歌は拾遺集当代において新しい、異質な歌であったことが知られるのであるが、では定家は、「今日見れば」歌が持つこのような特質に気づいていた上で、「見わたせば」の歌のモデルとして参考にしたのであろうか。

定家の初期の作品群には、歌を習学するという、初心者の心構えが顕著とされ、特に、俊成から厳訓を受けていたであろう当時の定家にとって、三代集を習学するということは大きな目標として掲げられていたと

想像される。

「初学百首」「堀河院題百首」両百首では、古今集に本質的な意味での規範を求め、代表的歌人の歌を徹底して学び、読人不知の歌にも共感し、積極的にその抒情の根元を求めたとされる。また、三代集以外にも、後拾遺集、金葉集などの新風的傾向の認められる歌の摂取や、『伊勢物語』『源氏物語』『狭衣物語』の基本的学習など、その幅は広いものであった。

「堀河院題百首」から四年を隔てる「二見浦百首」においても、前の両百首と同様の傾向を引継ぎ、詞句の摂取など、古今集を中心に学んでいたようである。

一方で、拾遺集歌を本歌として詠まれたとされる歌も見られる。その一例を次に挙げる。

吉野山かすめるそらをけさ見れば年は一夜のへだてなりけり
（『拾遺愚草』一〇一・春）

いまもこれすぎてもはるの俤は花見るみちの花の色〳〵
（同一一二・春）

散りねたゞあなうの花やさくからに春をへだつるかきねなりけり
（同一二一・夏）

いづるよりてる月かげの清見がたそらさへ氷る浪の上かな
（同一三七・秋）

「二見浦百首」の一首目、一〇一番歌は、公任『和歌九品』の上品上に置かれた秀歌としても知られる、『拾遺集』巻頭歌「春立つといふ許にや三吉野の山もかすみて今朝は見ゆらん」（春・一・壬生忠岑・抄集重出歌）が本歌とされるが、同じ拾遺集歌「ふしづけし淀の渡を今朝見ればとけん期もなく氷しにけり」（冬・二三四・平兼盛・抄集重出歌）の歌格、第三句「今朝見れば」、結句「…けり」を踏襲したとの指摘もある。[20] また一二一、一三七番歌は、拾遺集四季歌の代表的詠歌とされる、「我が宿の垣根や春を隔つらん夏来にけりと見ゆる卯花」（夏・八〇・順・抄集重出歌）、「天の原空さへさえや渡らん氷と見ゆる冬の夜の月」（冬・二四二・恵慶法師・抄集重出歌）の、特に詞続き、「垣根や春をへだつらん」「空さへさえや」にその影響が見られるのである。

これら秀歌はいずれも抄集重出歌（拾遺抄、拾遺集ともに入集している歌）であるが、一一二番歌には集新出歌、

咲かざらむ物とはなしに桜花面影にのみまだき見ゆらん
（雑春・一〇三六・躬恒）

の持つ、待花にその面影を見るという新しい発想が取り入れられているようである。

「二見浦百首」当時、集新出歌を参考とした詠作として、中周子氏は「定家の拾遺集享受」で、

おのづからあればある世にながらへてをしむと人に見えぬべき哉
（『拾遺愚草』一七二・述懐、『千載集』一一一三）

いかにしてしばしわすれんいのちだにあらばあふよのありもこそすれ

（集新出歌六四六・恋一・読人不知）＊傍線は中氏による

や、翌年の文治三年〈1187〉春、「皇后宮大輔百首」で詠まれた、

わすれぬやさはわすれけるわが心夢になせとぞいひてわかれし

（『拾遺愚草』二六八・逢不遇恋）

わがせこをわがこひをればわがやどの草さへ思ひうらがれにけり

（集新出歌八四五・恋三・人麿）

などの影響関係を挙げている。[21] 中氏は、右の集新出歌の、同音反復、重詞による音楽的表現は、単に音の響きの面白さのみでなく、定家の歌の内容とも深く関わるとし、集新出歌が定家の詠法に与えた影響の大きさを指摘する。

古来、「拾遺抄」が公任によってなされた「拾遺集」の秀歌撰との見方が長らくなされてきたため、平安後期以降、十巻本「拾遺抄」の方が二十巻本「拾遺集」より尊重、評価されていたことが俊頼『俊頼髄脳』（天永二年〈1111〉～永久元年〈1113〉の間に成立か）をはじめ、俊成『古来風体抄』（初撰本は建久八年〈1197〉成立）に至る歌論書や秀歌撰などの記述によって知られるのであるが、[22] 定家の場合、これまでの拾遺集歌に対する認識と評価は他の歌人とは異なっていた。『三代集之間事』（貞応元年〈1222〉成立）では、

微臣幼少之昔　初提携古集古歌之日　披見此集　忽抽感懐　愚意独慕之　窃雖握翫之　於亡父之眼前　未読之　但僅聞其説事等

（小沢正夫編『三代集の研究』明治書院　昭和五十六年　参照）

とあるように、幼少より父俊成に隠れて「拾遺集」を愛読していたことが知られるのであり、定家以前の拾遺抄重視の風潮と比べると、中氏の言われるように、若き日の定家が拾遺集を見た時の感慨と評価は、いかに先学の見解や当時の秀歌基準から自由であったかが知られるのである。

以上見てきたように、拾遺抄の秀歌はもとより、定家以前にはあまり注目されることのなかった集新出歌をも、定家は文治期という早い時期から積極的に学び、実作に用いていたようである。「今日見れば」の歌も例外ではなかった。古今、後撰集にはない、非現実的空間、虚構の美を表現し得た叙景歌の先駆けとして、定家は新古今的新風の薫りを嗅ぎ付けていたのではなかったか。そして、『拾遺集』という勅撰和歌集自体が、伝統的秀歌と「新しい歌」との両方を兼ね備えた歌集である点をも、定家は見抜いていたのかもしれないと想像されるのである。

「二見浦百首」を含めた定家の習学期というと、古今集歌の学習、摂取が中心とされ、殊に古今集、古今歌人が強調されがちであるが、集新出歌「今日見れば」の歌の存在をはじめ、定家における拾遺集歌との関係についても、今後改めて見直される必要があるのではないだろうか。

五　保憲女と『保憲女集』

当代としては斬新ともいえる保憲女の「今日見れば」の歌ではあった

が、定家以前では、そして以後も、あまり注意されなかったようである。

「今日見れば」の歌を参考として詠まれたと思われる歌を次に挙げる。

さらぬだに草の庵となるやどにけふはあやめをふきそふるかな
（「堀河院百首和歌」三九三・「菖蒲」・師時）

はれぬれば残れるくまもなかりけり空こそ月のひかりなりけれ
（『散木奇歌集』五一五・「漢霽明月」）

見わたせばなびかぬくさぞなかりける風こそのべのあるじなりけれ
（『重家集』五五八・「野風」）

「堀河百首」の「さらぬだに」の歌は、軒先に菖蒲草を挿した景を「草の庵」と見立てる主題がそのまま取り入れられているが、上句「さらぬだに草の庵となるやどに」の、そうでなくても、いつかは草の庵となって朽ちる運命の宿なのに、という発想が新たに加えられている。他の二首は、初句「はれぬれば」「見わたせば」、第三句「なかりけり」「なかりける」と、「今日見れば」の歌の歌格と類似している点で挙げた。このような歌格は他にも見られるが、「今日見れば」歌の、第三句「なかりけり」と否定することで、下句の対象を一層浮き上がらせるという効果を狙った詠は見出し難く、この二首を参考として挙げるにとどめた。

「今日見れば」の歌が拾遺集以外に採歌された歌集を探したところ、平安時代、鎌倉時代と経ても、勅撰、私撰歌集はおろか、歌論集、歌学書、秀歌撰など姿を現すことはない。南北朝時代に入って、『三百六十首和歌』（私撰集　延文年間〈1356～1360〉成立か）に「五月上旬」「読人不知」（一二六）と、『六華和歌集』（私撰集　貞治三年〈1364〉以降に成立）に「夏歌」「拾（遺集）」「読人不知」（三七五）として採られる程度なのである。他に、『源氏物語』初期の研究を批判的に総合した、注釈史上、画期的大著とされる、四辻善成著『河海抄』（貞治年間〈1362～1368〉初めに成立）において、源氏物語「橋姫」巻、

あやしき舟どもに柴刈り積み、をの〳〵何となき世の営みどもに行きかふさまどもの、はかなき水の上に浮かびたる、たれも思へばおなじごとなる世の常なさなり。われは浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かは、と思ひつゞけらる。　（新大系本より引用）

の箇所の「玉の台」項に、「桂台」の言葉とともに「今日見れば」の歌を注しているのが目立つぐらいである。[23] ただし、「今日見れば」歌には、他の引用歌と違って、その出典、作者名が記されていない。このことは、『三百六十首和歌』『六華和歌集』と同様、「今日見れば」の歌が南北朝期になってもなお、保憲女の歌とは知られず、拾遺集「読人不知」歌として、『河海抄』の時代にまで伝わっていたことを示唆するものであろう。

「今日見れば」の歌をはじめとして、『保憲女集』あるいはその歌が注目を集めることのなかった背景の一つに、その伝存過程において受けた損傷などによる、甚だしい本文の乱れが挙げられる。[24] また、保憲女自身についても、宮仕えのことや、権門の歌壇との交流など、その記述が残

された資料は今のところ見つかっておらず、保憲女について知るには、彼女の周辺人物や『保憲女集』の作品自体を手掛かりとする以外に方法がないという文献上の制約もあるだろう。保憲女は、周りから隔絶した、孤独な生涯を送ったと推測されており、ほぼ無名であったようである。「保憲女」の作者名がはじめて勅撰集に明示されるのは『風雅和歌集』からで、和歌史においてもその才能は埋もれたまま、脚光を浴びることはなかったのである。

『保憲女集』歌が、評価、文学作品の考究の対象となるのは、近代に入って岡一男氏の「賀茂保憲女とその作品」や、藤田明子氏の「賀茂保憲女研究（一）」まで待たねばならなかった。[25] 近年になされた『保憲女集』研究では、保憲女と同じ時代を生きた『源氏物語』作者である紫式部に、保憲女の歌や『賀茂保憲女集』が持つ作品のイメージから想像をかきたてられ、物語世界に取り込んでいたであろう影響例が報告されている。[26] また、保憲女の従兄弟、慶滋為政の孫にあたる相模や、初の組題百首である「堀河院百首和歌」の歌人ら、匡房、公実、俊頼、基俊などの後世に与えた影響についても、特殊な歌語の摂取にとどまらず、『保憲女集』全体が、初期百首の一つの手本として享受された点など、具体化されつつある。[27] 保憲女歌の、新しい歌材を自由な詠風で詠みんでいった、その清新さが堀川百首歌人らの注目を集めたと渦巻氏は述べる。

保憲女は、天文道に通じ陰陽師、暦博士としても高名であった賀茂保憲（延喜十七年〈917〉～貞元二年〈977〉）の娘であり、叔父には和漢に通じ、『池亭記』『日本往生極楽記』で知られる慶滋保胤を持つという環境に生きた。漢文や暦に関する知識に長け、『保憲女集』の序文に顕著に見出されるその才能は、対句表現、漢文訓読調の語彙、漢語の使用によっても知られる。[28] また、周りとの交流を断った、彼女の没交渉的な在り方が、伝統的な発想にとらわれない、清新な歌風を生んだとされる。

保憲女の才能が開花した『賀茂保憲女集』の作品の、当時、及び後世に与えた影響は決して少なくないと考えられる。『賀茂女集』（『冷泉家時雨亭叢書　平安私家集五』平成九年）や和歌文学大系『賀茂保憲女集』（平成十二年）の刊行など、近年その研究が進み、我が国の文学史における再評価が図られている。定家の「見わたせば」の歌における、拾遺集一一〇番歌の影響が推測される点から見ても、保憲女とその作品を改めて検討するによって、定家の歌風、ひいては新古今歌風の究明に、新たな進展がもたらされるものと期待されるのである。

六　定家「見わたせば」の歌と『源氏物語』「明石」巻

最後に、「見わたせば」の歌の背景として従来指摘されてきた『源氏物語』「明石」巻、

はるゝ〳〵と物のとゞこほりなき海づらなるに、中〳〵春秋の花紅葉の盛りなるよりは、たゞそこはかとなう茂れる蔭どもなまめかしきに、水鶏のうちたゝきたるは、たが門さして、と哀におぼゆ。

（新大系本より引用）

の箇所との関わりについて触れておきたい。

『源氏物語』「明石」巻のこの風景は、右大臣、弘徽殿大后の策謀により須磨に失脚させられた光源氏が、春の海辺で禊をしていたおり、暴風雨に見舞われ、明石に漂着する。そこで明石の入道に迎えられ明石に移住、初夏の「のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく見えわたれる」浜の館で、明石入道を相手に、源氏が琴を弾きながら、かつての華やかな宮廷生活を思い懐かしみ、配所暮らしのわが身を悲嘆する場面に描かれる。

春秋の代表的景物である「花紅葉の盛りなる」よりは、「はる〳〵と物のとゞこほりなき海づら」を前に、「たゞそこはかとなう茂れる蔭ども」に趣が感じられるとする詞続きの集合は、「見わたせば」の歌の「花も紅葉も」の詞句をはじめ、「此詞を、浦の苫屋の秋の夕暮と取なされたる。」とする『八代集抄』などの指摘に代表されるように、「見わたせば」の一首全体に呼応するのであり、本説とされてきた理由もここにあるのだろう。

ところで、『源氏物語』において、その準拠、引用などで関連を持つ作品として、しばしば『白氏文集』が挙げられる。須磨下向から須磨閑居を経て、明石移住に至る「須磨」「明石」両巻を通しての、貴公子光源氏の境涯や心事は、配流、流寓の経験を有する白居易、道真、屈原などと軌を一つにして語られるとされるが、なかでも白居易の左遷生活での、境遇、交友、心情に器を借りて描かれたとされる箇所は多い。[29] 右に挙げた定家「見わたせば」の歌の背景として指摘される箇所の前後にも、『白氏文集』からの引用が見られる本文を控えているのであるが、源氏が配所において、往時の宮中生活を思い、今の配所暮らしを嘆くという本説箇所一連の場面描写においても、江州に左遷され、侘び住まいを嘆きつつ、都で栄達の道を歩む友を思いやった白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」の対句構造と重なる要素があるように思われるのである。つまり、『源氏物語』「明石」巻に見られる、源氏の白居易追体験は、「見わたせば」歌の本説とされる箇所一連においても、「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」を下敷きとする形で描かれていた可能性が推測されるのである。さらに、その引用は詩句だけの表現形式的なものにとどまらず、白居易の、過去を懐かしみ、今を悲しむという心境をも汲み取った上でなされたのではないだろうか。『白氏文集』に通暁していたとされる源氏作者、紫式部のことを考慮すれば、「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」に込められた白居易の寂寥と、源氏の配所における述懐とは、あながち無関係ではないと考えられるのである。[30]

以上から、定家の「見わたせば」の背景とされる「明石」巻の本説箇所一連にも、白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」との関連が推測されるのである。このような推測が認められるなら、定家「見わたせば」の歌にも白詩の面影が形をとどめるはずであり、拾遺集一一〇番歌と合わせて、『源氏物語』「明石」巻の本説箇所一連からも、白詩の影響を間接的に受容する結果となったのではないかと考えるのである。

おわりに

定家「見わたせば」の歌と、白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」との関係について見てきた。結論としては、拾遺集一一〇番歌、及び『源氏物語』「明石」巻の本説箇所一連を通しての、二重に及ぶ間接的摂

取の可能性が推測されるのであり、様々な要素が入り交じってできた複雑な一首であることが知られるのである。

石田吉貞氏『妖艶　定家の美』によれば、「二見浦百首」は、「定家の新しき歌の出発であり、定家の和歌革命の烽火であって、もっとも重大」な百首歌であったとされるが、その決意を歌にしたのが「見わたせば」の歌であったとする。[31] 新しい歌を詠みたいという定家の欲求は、「和歌の歴史を根柢から揺がすほどの巨大な歌」の助けを必要とし、それが西行の、

こころなき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮

（『新古今集』秋上・三六二）

の歌であったと述べる。また、石田氏は、「定家は『浦の苫屋の秋の夕暮』という歌によって、西行の『鴫立つ沢の秋の夕暮』を、より以上に実感に迫る荒廃として詠み替えている」として、「見わたせば」の歌が西行「こころなき」の歌に触発された形で詠まれたものと位置づけている。[32]

西行の「こころなき」の歌は、「こころ」を「なし」と打ち消すことで、後拾遺集の時代から歌に描かれ続け、類型化した「秋の夕暮」に、新たな美を提示するという、当時としては画期的な歌であったと考えられる。[33]「初学百首」「堀河院題百首」の二つの百首歌を経てもなお、「新しい歌」を創り出せずにいた当時の定家にとって、「こころなき」の歌の存在を知っていたとするならば、そのインパクトは強烈であったはずである。

「こころなき」と打ち消すことで、「しぎたつ沢の秋の夕暮」が一層蕭条と「あはれ」に浮き上がってくるという西行歌の仕掛けは、定家に拾遺集一一〇番歌「今日見れば」の歌に関心を向かわせたのではないか。「玉の台」を「なかりけり」と消失させることで現れる「菖蒲の草の庵」の、新奇ゆえに新鮮な印象は、そのまま定家に「花も紅葉」も「なかりけり」と消滅させ、代わりに荒涼とした「浦のとまやの秋の夕暮」をより鮮やかに現出させたのではないか。[34]

また、「二見浦百首」が詠まれた前年の寿永四年〈一一八五〉という年は、平家一門が滅亡した年でもある。治承四年〈一一八〇〉、定家十九歳のとき、平清盛が安徳天皇の外祖父となって栄華の絶頂を極めてから、わずか五年後のことであった。都は戦場と化し、東大寺、興福寺などが焼失、煙と消えた。はかない現実を目の当たりにするとともに、王朝文化、ひいては王朝美までもが喪失したことを、直感として感じ取っていたであろう定家の胸に、「今日見れば玉の台もなかりけり」の歌が、実感として響くことがあったと想像することは難くないのである。このような歴史的背景と、そこに生きた定家の実体験とが、「見わたせば」の歌を詠み出したのではなかったか。

「今日見れば」の歌が、『定家八代抄』をはじめとする定家の秀歌撰等に取られていない理由など、問題点はまだ残るが、これまで本説とされてきた『源氏物語』「明石」巻の箇所一連と、これまでに指摘されることのなかった拾遺集一一〇歌「今日見れば」とを介することで、定家「見わたせば」の歌の背後に白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」

の面影が漂うものと、試論を呈してみた。

註

(1) 近年では、森澤眞直氏「定家歌『みわたせば花も紅葉も』論—研究史の検証と解釈の秩序—」(「日本文芸論叢」平成十二年三月)において、「見わたせば」歌のこれまでの研究過程が整理され、解釈上の論点が具体化、検証されている。

(2) 杉本行夫『懐風藻』(弘文堂書房　昭和十八年)、水野平次『白楽天と日本文学』(大学堂書店　昭和五十七年)、漢詩大系『白楽天』田中克己著(集英社　昭和三十九年)

(3) 小島吉雄『新古今和歌集の研究正篇』(星野書房　昭和十九年、和泉書院　平成五年復刊)

(4) 赤羽淑『定家の歌一首』(桜楓社　昭和五十一年)

(5) 石川徹「定家の作歌と物語との関係—『花も紅葉もなかりけり』の解釈を中心に—」(「日本文学研究」昭和二十四年十月、『古代小説史稿』増訂版　東京パルトス社　平成八年)

(6) 久保田淳『新古今和歌集全評釈』(講談社　昭和五十一年)

(7) 長谷完治「漢詩文と定家の和歌」(「語文」昭和四十一年六月)

(8) 定家と白詩「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」との関係を考える上での参考として、歌論集などに見られる記述を次に挙げておく。

常によき詩を吟じて、心をすますべき也。詩は心をたかくすますものにて侍るから、蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中、此詩をぞ亡父卿は詠ぜられし。

(『愚見抄』日本歌学大系四巻)

一、定家の申されたるは、歌を案ぜん時は、つねに白氏文集の、故郷有母秋風涙、旅館無人暮雨魂の詩を吟ぜば、心がたけたかくなりてよき歌のよまるゝ也。蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中の詩をも吟ぜよと也。

(『正徹物語』下・日本歌学大系五巻)

(9) 『二見浦百首　藤原定家拾遺愚草注釈』(桜楓社　昭和五十六年)における神谷敏成氏の指摘による。本百首では他に、

月よするうらわの浪をふもとにてまづ袖ぬらす峯の松風

(『拾遺愚草』一九四・雑「旅」)

なども同様の手法とされる。

(10) 新釈漢文大系『白氏文集』岡村繁著(明治書院　平成二年)

(11) 憲宗元和十年〈815〉、白居易は江州司馬に左遷される。草堂を作ったのは同十二年で、「蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中」の詩はこの年の作とされる。

(12) 太田次男「白居易及びその詩文の受容を繞って」(白居易研究講座　第三巻『日本における受容(韻文篇)』勉誠社　平成五年)による。『白氏文集』の訓点が一条帝の時代〈986〜1010〉に開始され、訓点本が成立したことでもたらされた、承和年間〈834〜847〉初期に次ぐ白詩受容の盛況を指す。

(13) 『保憲女集』の成立は、序文の疱瘡流行時編纂との記述、

此歌は、あめのみかどの御時に、もがさといふものおこりて、やみけるなかに、かもうちなるをんな、よろづのひとにおとれりけり、さるなかに、ただもがさをなむすぐれてやみける、かさのみにもあらず、おほくのやまひをぞしけると、からうじてこの歌よりなんよみがへりける、

から、「もがさ」を天然痘と見て、正暦四年〈993〉初冬から翌春(作者四十歳頃)に成立したとする岡一男氏「賀茂保憲女とその作品」(「国文学研究」昭和二十五年十一月)の説と、「もがさ」は天然痘ではなく麻疹であった可能性や、『保憲女集』一九九番歌の一節「ふたたびきてしすみぞめのころも」が長徳三年の、叔父慶滋保胤他界を指すと考えられる点などから、長徳四年〈998〉頃に成立したとの松平盟子氏「『賀茂保憲女集』の研究—疱瘡罹病年代と序文について—」(「南山国文論集」昭和五十二年十一月)の両説がある。長徳二年〈996〉から同三年の間に成立したとされる拾遺抄に「今日見れば」の歌が採られていない点から、後者が有力とされつつある。また、『保憲女集』の歌の配列から、「今日見れば」の歌が、拾遺集から『保憲女集』に加えられた可能性は極めて低いことが指摘されており、本稿もこの説に従う。

(14) 「草の庵」という詞は万葉集にはなく、また平安期には用例が少ないようで、『伊勢物語』第五十六段に、「わが袖は草の庵にあらねども暮るれば露のやどりなりけり」（一〇二）とあるのが早い例のようである。勅撰集では、「くさのいほなにつゆけしとおもひけんもらぬいはやも袖はぬれけり」（『金葉集』雑上・五三三・僧正行尊）があり、「草の庵」は草の縁語の露とともに詠まれることが多い。院政期には『法華経』信解品のうち「止宿草庵」が歌題として詠まれるが、隠者生活と深く結びついた、中世的歌語と見られる（「草の庵」項参照・『歌ことば歌枕大辞典』角川書店　平成十一年）。「今日見れば」の歌の「菖蒲の草の庵」という歌語は、時代的にも、歌の措辞としても当時珍しかったと想像される。

(15) 和歌文学大系『賀茂保憲女集』武田早苗著（明治書院　平成十二年）

(16) 「二見浦百首」当時、定家は三代集を中心に学んでいたとされる点、『賀茂保憲女集』自体の存在があまり知られていなかっただろうと想像される点から、本稿では、「今日見れば」の歌が、『保憲女集』からではなく『拾遺集』から定家により摂取されたものと想定して扱う。

(17)

郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするかな

（『古今集』恋一・四六九・題しらず・読人しらず）

五月五日、小さき飾粽を山菅の籠に入れて、為雅の朝臣の女に心ざすとて

心ざし深き汀に刈る菰は千年の五月いつか忘れん

（『拾遺集』雑賀・一一七二・道綱女）

(18) 佐藤和喜『平安和歌文学表現論』（有精堂　平成五年）

(19) 近藤みゆき氏「摂関期和歌と白居易」（白居易研究講座　第三巻『日本における受容（韻文篇）』勉誠社　平成五年）においても、白詩の佳句世界の享受が王朝和歌に豊かな広がりを与え、そうして獲得された美意識が、古今以後の伝統和歌のあり方に一石を投じた点が指摘されている。

(20) 『二見浦百首　藤原定家拾遺愚草注釈』における佐々木貴子氏の指摘による。

(21) 中周子「定家の拾遺集享受」（『王朝の文学とその系譜』片桐洋一編　和泉書院　平成三年）

(22) 他に拾遺抄偏重の具体的記述については、中氏により、範兼『童蒙抄』『後六々撰』、清輔『奥義抄』などが挙げられている。

(23) 玉上琢彌編『紫明抄　河海抄』（角川書店　昭和四十三年）を参照。

(24) 定家は『保憲女集』本文の校訂を行なったとされる。定家加筆の冷泉家時雨亭文庫蔵『賀茂女集』（『冷泉家時雨亭叢書　平安私家集五』朝日新聞社　平成九年）を見ると、本来あった表紙が失われた後の現表紙には、「賀茂女集」「一首無可取歌」と定家のものと思われる筆跡があり、この現表紙は、定家の心覚えのメモであった可能性が指摘されている（「解題」片桐洋一氏による）。「一首無可取歌」は、取るべき秀歌がない意なのか、損傷などによる文脈不正のひどさのためか、あるいはその両方なのか分からない。保憲女の歌自体が持つ晦渋さ、伝統を無視した新奇な詠は諸家の指摘するところであり、また、恣意的な本文改訂は絶対せずに、他本による校訂のみに執着した定家にとってみれば、著しい本文の乱れは如何ともし難く、本文を空白のまま残したり、読解不可能な本文をそのままとどめていることから、新古今集の撰集資料としては不十分と判断したものとする、片桐氏の指摘もある（実際には、『新古今集』雑下・一七四四番歌として、『保憲女集』一七七番歌が「読人不知」で入集、撰者は雅経となっている）。

(25) 岡一男「賀茂保憲女とその作品」（「国文学研究」昭和二十五年十一月、『古典の再評価』有精堂　昭和四十三年）、藤田明子「賀茂保憲女研究（一）」（「国語国文研究」昭和三十五年十月）

(26) 天野紀代子「『まれの細道』賀茂保憲女と紫式部をつなぐ」（「日本文学」昭和六十三年八月）

(27) 渦巻恵「『賀茂保憲女集』再評価」（「中古文学」平成八年五月）

(28) 中島絵里子「『賀茂保憲女集』の研究―保憲女の発想と漢詩文―」（「新樹」平成八年九月）

(29) 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究篇』（培風館　昭和十八年）、古沢末知男『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』（桜楓社　昭和三十九年）、丸山キヨ子「源氏物語と漢詩文―特に白氏文集との関わりについて―」源氏物語講座第八巻『諸本・源泉・影響・研究史』（有精堂　昭和四十七年）などを参考。

(30) 天野紀代子「交友の方法―沈淪・流謫の男同志―」（「文学」昭和五十七年八月、『源氏物語の視界―准拠と引用』王朝物語研究会編　新典社　平成六年）では、『源氏物語』「葵」「賢木」「須磨」巻を通して、『白氏文集』の詩句、詩語、状況といった「形」の上の参考だけでなく、白居易の心情にまで接近し、表現し得たとして、源氏物語作者は白居易圏の交友の本質を見抜いていたとする。

(31) 石田吉貞『妖艶　定家の美』（塙書房　昭和五十四年）

(32) 一方、西行の「こころなき」の歌が収められた『御裳濯河歌合』は、「二見浦百首」の翌年、文治三年〈1187〉に結構されたと推定されることから、「二見浦百首」の頃、定家が西行の「こころなし」の歌を知っていたのかどうか疑う説もある（『二見浦百首　藤原定家拾遺愚草注釈』における神谷敏成氏による指摘）。しかし、「二見浦百首」が西行勧進によってなされた点、西行になり代わるようにして詠まれた歌が散見される点、また本百首「しぎのたつ秋の山田のかり枕たがすることぞ心ならでは」（『拾遺愚草』一九〇・雑「田家」）の歌の存在などから、西行「こころなき」の歌との関連を検討する見方もあり（上野一孝氏「定家『二見浦百首』の構想」『論集　中世の文学　韻文篇』久保田淳編　明治書院　平成六年）、「見わたせば」の歌における西行「こころなき」の歌との関わりについては説が分かれる。

(33) 拙稿「『心なし』の歌について―千載・新古今を中心に―」（『日本文芸思潮史論叢』大野順一先生古稀記念論文集刊行会編　平成十三年三月）

(34) 定家の、人の意表を突く面白さが目を引く、第三句で打ち消す形の詠は、既に「初学百首」から見られるものとして指摘されている（久保田淳『新古今歌人の研究』「新古今への道」東京大学出版社　昭和四十八年）。

天のはらおもへばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ

（『拾遺愚草』三七・秋）

「見わたせば」の歌も含め、このような詠法は定家に見られる個性として、早くは赤羽淑氏『藤原定家の歌風』（桜楓社　昭和六十年）などによって、「定家の否定表現」という形で指摘され、他に和泉久子氏「定家の歌における『なかりけり』・『なし』の用法の一面」（「鶴見女子大学紀要」昭和四十三年十二月）などの論文がある。また、谷知子氏「新古今歌人の「消失」を詠んだ歌群について―イメージの重層法の形成―」（「国語と国文学」昭和六十一年十二月）で報告されているような、当時の歌風の動向との関わり、さらに「見わたせば」の歌が持つ連歌的要素についても今後検討される必要があるだろう。